

## 静岡県本部編 (その2)

## 単組をめぐり「じちけん」活動を発見!

静岡県本部の河合克樹さんと佐野ひかるさんが各単組を回って見たら…

——単組を回られてどのような反応でしたか。

今年の一月から県内七つの単組を回り、執行委員会の場で「じちけん」を紹介させてもらいました。正直なところ半分ぐらいの方が「じちけんって何?」という反応でした。これまでの自治研活動とこれからのゆるい「じちけん」についてお話をしますが、逆にゆるく間口が広すぎて「じちけん」とは何かがわかりにくかったのかもしれない。

三役をはじめ単組の皆さんに、まずは「じちけん」の存在を知ってもらえたのが最初の成果ですね。

——各単組に出向かれて新たな発見はあ

りましたか。

普段、なかなか単組の皆さんと接する機会や県内の各自治体の実情を知る機会はありません。今回、単組の皆さんと直接お話しができ、いろいろな自治体を知ることができたのは良かったです。とくに、沼津市では、まちづくりの素晴らしい活動を展開されている組合員と出会うことができました(囲み参照)。彼らのまちづくりの活動は、「じちけん」や組合とはまったく関係ないんですが、まさに「じちけん」活動なんですよね。その活動のお話を聞きながら、あれこれ難しいことは考えず、自らの住む街を愛し、楽しんで取り組むことが大事

## 紹介 ● Proud Numazu研究会

僕たちのまちは、僕たちがおもしろくする

シビックプライドを合言葉に、沼津市の魅力をまちの人たちと一緒ににつくっているProud Numazu研究会。三澤和也さんをはじめとするメンバーのほとんどが沼津市役所の職員です。

三澤さんが、

三島市役所に出向中、市職員が街に飛び込んで一緒にまちづくりに進める姿に触発され、沼津に戻ってから「沼津のことを知らなければ」とDJ(団塊ジュニア)会を開催しました。D

J会の「会いたい人に会おう!」という企画で、地元のデザイナーや八百屋、バーテンダーから地域への思いを聞くなかで、「自分たちでも何かやってみよう!」、と、Proud Numazu研究会を立ち上げました。

「美酒美食」をテーマとした「沼津自慢フェスタ」は、料理人とバーテンダーの方との協働イベントで、今では三日間で一万人以上が集まるまでになりました。

「アクティビティ」をテーマとした「沼津ビーチフェス」もシーカヤックやウィンドサーフィンを通じて沼津の海の素晴らしさを体感してもらうイベントです。

今後は、商店街のなかに沼津のことを考える場をつくりたいと語るメンバー。一人で何かを始めるのは難しいけれど、みんなが集まることで街に飛び込むきっかけになっていると感じました。「じちけん」活動も興味のあることに飛び込むことから始めるかもしれません。

(河合克樹・静岡県本部執行委員)

な要素だとあらためて気づかされました。——チャレサポへの挑戦を促す次なるステップについてお聞かせください。

まずできることからということで、県本部発行の『自治研静岡ニュース』一月号から、「はじめよう静岡じちけん」という連載コーナーを立ち上げ、「じちけん」活動への呼びかけを始めています。

単組を回るなかで、「じちけん」ピギナーの私たちが、「じちけん」について説明する難しさもありました。そこで、各単組の方に、より深く身近に「じちけん」を知ってもらおうと、「じちけん」活動のペテランを県外から招き、静岡じちけん集会を三月三日に企画しています。各単組から二〇人ぐらいに参加してもらい、少人数でじっくりとコミュニケーションをとることで、チャレサポに挑戦したいという組合員が出てくることを期待しています。まずはこの集会が充実した内容で終わるよう全力を尽くしたいと思っています。(二月一六日@静岡県本部事務所)

## 「じちけん」を感じることから…

Proud Numazu研究会の活動、すばらしいですね。実際、こうした若手職員によるまちづくり活動は、各地域で生まれているようですが、これまでは「それは組合と関係ない」「個人の活動」「自治研ではない」と思われていました。でも、そこに今回、河合さん・佐野さんは、まさに「じちけん」を感じています。その(気づき)こそが大事だと思うわけです。そこにすでに活動があるのなら、もはや「誰がどう始めたか」は問題ではないでしょう。「組合活動・自治研ではない」として排除するのではなく、静岡県本部の例のように組合の役員や自治研担当の側から歩み寄っていくという動きが必要でしょう。むしろ、若手職員発の自由な活動とどこまで協働できるかどうかは、今後の自治研推進にとって大きな試金石になるのではないのでしょうか。

(自治研マイスター)